記念日植樹券事業 20周年記念報告書

「1本の木は 地球という森の入り口」を合い言葉に 活動した20年を振り返る

企業とNPOのパートナーシップ事業

中部電力株式会社　　認定NPO法人 中部リサイクル運動市民の会

CONTENTS

P01 ➔ 記念日植樹券事業とは･･･
P02 ➔ 写真で見る主な活動実績
P04 ➔ 20周年の節目に開催する2つのイベント
観葉植物プレゼント！
P05 ➔ 20周年記念座談会

記念日植樹券事業とは･･･

◎中部電力株式会社の創立50周年謝恩事業の一環で、
NPO法人中部リサイクル運動市民の会との協働事業として、2001年から進められてきて2020年度で20年目を迎える。

◎「1本の木を植える」きっかけをお届けすることで、
自然を大切にする心と環境に優しい行動が広がることを目指す活動である。

◎「記念日植樹券」（木を植えられる権利＝苗木）を抽選でプレゼントする。
当選者は以下の3つの中から使い道を選ぶことができる。

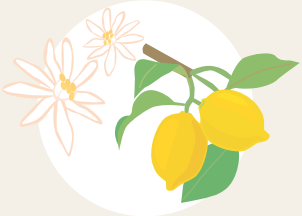
① それぞれの大切な記念日に自ら植える、または大切な人にプレゼント
② 植樹活動を行うNPOに寄付
③ 各地で植樹活動を行うNPOの協力のもと植樹ツアーに参加

▲記念日に植えた30㎝の苗木がこんなに大きくなりました。レモンの収穫が楽しみです。

届いた苗木

▲森林の風 御在所岳での植樹ツアー

▲ハッピーロードネット 東北被災地で活動するNPO



写真で見る主な活動実績

活　動	植樹前	植樹後

ソムニード（ムラのミライ）

◎南インドオリッサ州
◎2001年度～2012年度

- 果樹にはマンゴー、カシューナッツなどがあり、住民たちの収入向上につながっている。
- 植林により、土壌と水の確保状況の改善に役立った。

穂の国森づくりの会

◎愛知県設楽郡
◎2001年度～2002年度

- 原生林周辺の人工林跡地に広葉樹を植樹する活動は、「穂の国みんなの森活動」として現在も継続されている。
- 定期的に手入れが行われており、苗木は順調に生育している。

白川郷村塾

◎岐阜県白川村
◎2003年度～2009年度

- 植樹した草木は、順調に成長している。
- 国道沿いのアジサイは白川郷の美しい景観に一役買っている。

愛・地球博会場

◎迎賓館南側 他
◎2004年度～2005年度

- 地域の里山として、大人にも子どもにも親しまれ活用されている。

スポーツサポート協会

◎長野県 野麦峠スキー場
◎2008年度～2011年度

- スキー場の運営母体が変わったため、当時に植樹したレンゲつつじは放置状態になっている。

写真で見る主な活動実績

活　動	植樹前	植樹後

緑化旅団 緑の大地

◎中国 内モンゴル自治区
◎2008年度～2015年度

- 記念日植樹券事業の植樹地では、順調に植物が生育し、見事に緑化が進んでいる。
- 記念日植樹券事業以降も、現在までナラスさんの親族が継続して植樹活動を行っており、多くの住民が参加している。

森林（もり）の風

◎三重県菰野町 御在所岳
◎2010年度～2016年度

- これまで植樹したカモシカセンター跡地のシャクナゲなどは、寒さのためあまり大きくなっていない（50㎝くらいか）が、枯れることなくたくましく育っている。

桜ライン311

◎岩手県陸前高田市
◎2013年度～

- 全長170㎞への植樹を目標に活動しており、現在は目標の約1割の植樹ができている。
- 定期的なメンテナンスにより、すでに花が咲いているものがある。

ハッピーロードネット

◎福島県浜通り
◎2013年度～

- 国道6号線を中心に桜並木ができており、過去に植えた桜の中には花を咲かせるようになったものもある。
- 目標20,000本の約5割の植樹が完了した。

時ノ寿の森クラブ

◎静岡県掛川市
◎2015年度～

- 時ノ寿の森クラブの育樹のもと順調に成長している。

活動と実績について　詳しくは、中部電力ホームページ ➔ 環境コミュニケーション活動 ➔ 記念日植樹券をご覧下さい。

20周年の節目に開催する2つのイベント

この大きな節目を迎えるにあたり、この事業に参加された一般のお客さまから記念日植樹にまつわるエピソードや苗木の生育状況を、植樹活動を行うNPO（民間非営利団体）の方々からは植樹した木々の現況や現在抱えている課題を報告していただき、それらを共有するとともに今後の可能性を考えるイベントを開催することにした。ひとつはお客さま向けの謝恩イベント「観葉植物プレゼント」。もうひとつは植樹NPOの方々および本事業を主催する中部電力と中部リサイクル運動市民の会が集う「20周年記念座談会」である。

お客さま向けの謝恩イベント

観葉植物プレゼント！

プレゼント企画①

**～これまでの感謝と
今後の活動の広がりを祈念して～
抽選で500名様に
観葉植物をプレゼント。**

プレゼント企画②

**～あのときの苗木は「今」～
抽選で100名様に
観葉植物プレゼント。**

これまでに当選され、
記念日に苗木を受け取られた方から、
苗木の成長のようすを募集。

〈表　面〉

〈裏　面〉

あのときの苗木は「今」エピソード

2000年に長男が生まれ、2001年に苗木が当選したので、ちょうど息子と同い年。あれから息子の成長と共にレモンの収穫を楽しみながら、ここまで来たんだなあと思い返しています。

最愛の愛鳥が天国に旅立った日に届けていただいた想い入れのあるキンカンなので、生まれ変わりの我が子のように愛情を持って、大切に大切に育てています。おかげさまで、毎年我が子に再会できた想いで、おいしいキンカンを楽しませていただいています！

家を新築した年にどんぐりの木をいただきました。11年前、2年生だった息子は、今春から大学生。おなかの中にいた赤ちゃんは、2分の1成人式を迎え、今度5年生になります。この冬、長男が初剪定をしてくれました。妹達が木登りしやすいよう考え、枝を残してくれました。少し小さくなり、さっぱりしたどんぐりの木。これからも大切にしたいと思います。

NPOの方々および主催する中部電力と中部リサイクルが集う

20周年記念座談会

プロローグ

開会前、会場の大型ディスプレイに放映されたのは、2012年につくられたDVD映像。「一本の木は地球という森の入り口」というフレーズで始まり、当時の社会や環境の問題が映像として流れ、我々はどう向き合えばいいのかという課題が突きつけられる。そして課題解決のひとつとして、「記念日植樹券事業」が提案される。当時の貴重な映像や取材時の様子を知ることができる、オープニングにふさわしいムービーであった。

◎開催日：2021年2月2日　13:30～16:00

◎開催方法と場所：ライブ（中部電力 本店2-3会議室）＆リモート方式

◎主催者：

- 中部電力株式会社（以降、中部電力）
  総務・広報・地域共生本部 大塚和則部長
  広報推進グループ 長治宗範グループ長、村瀬直利課長、大谷亜弓主任
- 認定NPO法人 中部リサイクル運動市民の会（以降、中部リサイクル）
  萩原喜之（創立者）、中川恵子（顧問）、和喜田恵介（事務局長）、庄司知教（元担当者）

◎植樹NPOおよび参加者（敬称略）：

- ソムニード（現・ムラのミライ）（兵庫県西宮市、認定NPO法人） 和田信明（元代表理事）
- 白川郷村塾（岐阜県白川村、NPO法人） 田口節子（事務局長）
- 緑化旅団 緑の大地（長野県須坂市、NPO法人） 娜日蘇（ナラス）
- 森林（もり）の風（三重県四日市市、認定NPO法人） 瀧口邦夫（会長）
- 桜ライン311（岩手県陸前高田市、認定NPO法人） 岡本翔馬（代表理事）
- 時ノ寿の森クラブ（静岡県掛川市、NPO法人） 松浦成夫（理事長）、大石淳平（事務局長）

※穂の国森づくりの会（愛知県豊橋市）、ハッピーロードネット（福島県双葉郡）は欠席。

◎進　行

司　会：中部リサイクル 萩原喜之

1. 開会のあいさつ
2. 第１部「20年の振り返り」
3. 第２部「今後の活動について」
4. 閉会のあいさつ

1. 開会のあいさつ　中部電力 大塚和則部長

本来なら、この座談会は参加者の皆さんが一堂に会して行われる予定でした。しかし、現在はコロナ禍による緊急事態宣言が発令されている状況です。次善の策としてリモート方式で行うことになりましたので、よろしくお願いします。

2001年から始まった「記念日植樹券事業」は、当社の創立50周年に行われた謝恩事業のひとつでした。その頃の環境問題に対する当社の対応をみると、「二酸化炭素の排出を1990年比で6％削減」という目標を掲げていたという状況でした。「脱炭素へ」という目標が普通に受け入れられている現在からは考えられない目標設定でした。これは20年間の環境問題に対する私たちの取り組みの成果でもあると思います。中部リサイクルさんと一緒に行ってきた「記念日植樹券事業」は、おかげさまで、66,000名を超えるみなさまや13団体のＮＰＯのみなさんと共に、440,000本以上の苗木を植えることができました。

本日の座談会に参加されているNPOのみなさんと20年間を振り返りながら、これから先にどのようなことができるのか話し合いたいと思います。そして、この活動が次世代へ引き継がれていき、住みよい日本そして地球をつくる新たなキックオフの会になれば幸いです。

2. 第1部「20年の振り返り」

▲司会／中部リサイクル・萩原喜之

▲中部電力・大谷亜弓

▲ソムニード（現・ムラのミライ）・和田信明

▲中部リサイクル・中川恵子

―20年間の実績について、中部電力の大谷さんに報告をしていただきたいと思います。

大谷：おかげさまで、2018年までに66,000名を超えるみなさまと、13団体のNPOさんとともに、440,000本以上の苗木を植えることができました。

これまでの「記念日植樹券」の当選者の方からは、“38回目の結婚記念日に、嫁いでいった娘さんからシャクナゲの苗木をプレゼントされた” “お孫さんからコナラの苗木をプレゼントされた”など様々なエピソードをいただいています。他にも植樹活動を行うNPOに寄付したり、植樹ツアーに参加されたりと貢献していただきました。改めて感謝いたします。

―では、20年の振り返りについて、オンライン参加されているNPOの6団体の方からレポートしていただきます。ソムニード（現・ムラのミライ）の和田さんから、どうぞ。

和田：2001年当時の団体名は「ソムニード」。その年に記念日植樹券をいただき、南インドで植樹したのが始まりでした。私たちは、1900年代から木のみならず川の流れなどを考慮して地域全体の資源管理をするかたちで植樹をしてきました。2002年に、中部電力さんと中部リサイクルさんが、南インドのオリッサ州プットシル村を訪問されて、記念日植樹事業のお話しをされました。日本の企業である中部電力さんがそういうことを始める時代になったのかと改めて思いました。

―開会前に放映されたムービーには、プットシル村の映像が使われています。その当時のことを中部電力の大塚さんにお話をうかがいます。

大塚：記念日植樹券事業の他に、中部電力のPRムービーを作る目的もありました。海外なので撮影自体も大変でしたが、それよりも、インド政府の規制が厳しく、撮影や編集に苦労した記憶があります。

―プットシル村をその当時に訪問した、中部リサイクルの中川さんにもお聞きします。

中川：2001年からこの事業に関する現場づくりの活動を始めて、2002年にプットシル村を訪問しました。村の人たちは「木を伐採して森がなくなり、暮らしが貧しくなった…」と教えてくれましたが、現地を訪問したことで、そのことが実感できました。そして、木を失った山々は、2012年まで植樹を続けることで、みるみる緑豊かな森へと変わっていったことが印象に残っています。

▲白川郷村塾・田口節子

▲中部リサイクル・庄司知教

▲緑化旅団 緑の大地・娜日蘇

▲植林地に建てられた「日中友好林記念碑」

▲裏に刻まれた緑の大地、中部電力、中部リサイクルの名前

―次は、白川郷村塾の田口さんに現在の状況をお聞きします。

田口：白川郷での植樹ツアーは2003年から2009年まで行い、中部リサイクルさんと中部電力さんが大型バスでたくさんの方たちを連れてきてくださいました。山菜天ぷらや豚汁を作って歓迎し、一緒に植樹をしました。その当時に植樹をした156号線沿いは、岐阜県の管理になり、手入れもしてもらっています。最後のツアーからかなり時間が経過して現在は仲間のほとんどが高齢化してしまい、活発な活動はできていません。

―2005年に開催された「愛・地球博」会場でも、記念日植樹ツアーを行いました。まだ工事中なのに800人の参加者が訪れるという前代未聞のツアーでした。中部リサイクルの庄司さんに当時の状況をお聞きします。

庄司：2001年から2017年まで事務局として活動をしました。開会前に流れたDVDを見ながら、この20年間は参加者のみなさまに育てられたのだなと、改めて思っています。私は「雨男」で、担当した植樹ツアーは雨が降ることが多く、万博会場も雨でした。その中で800人の参加者を大型バス4台でピストン輸送をして、迎賓館の南側へ植樹しました。現在はたくましく育ち、立派な森になっています。

―「緑化旅団 緑の大地」の娜日蘇さん、20年を振り返っていかがですか。

娜日蘇：私のふるさとは、中国の内モンゴル自治区にあるバヤンボリグ村です。私は当時、日本に留学をして長野市で勤めていました。「緑化旅団 緑の大地」の小林紀雄代表と出会ったときに「私の実家があるバヤンボリグ村が砂漠化しているので植樹をしたい」と伝えました。小林さんは快諾してくれて、2006年に現地を視察しました。調べると、砂の30㎝下には水もあり、昔は草原だったので草の根も残っており、「木を植えれば緑が戻るでしょう」と言われました。内モンゴルでは、風が吹くと砂が舞い上がって移動し、地面が砂に覆われてしまいます。それを防ぐために、植樹をして砂が移動しないようにします。砂漠でも良く育つスナヤナギ、ポプラ、ニレの3種類の苗木をこれまで植えてきました。2008年に中部電力さんと中部リサイクルさんが視察に来られて、2015年までの8年間に合計35万本の苗木を植樹させていただきました。今では、昔のような草原風景がだんだんと戻ってきたように思います。そして、植林地に「日中友好林記念碑」が建てられ、碑には「緑の大地」と中部電力さんや中部リサイクルさんの名前も刻まれています。さらに「緑の大地」へは、2011年にバヤンボリグ村から感謝状が贈られ、2014年には日本政府から環境大臣賞が授与されました。

▲森林（もり）の風・瀧口邦夫

―「森林の風」の瀧口さん、御在所岳頂上の現状はいかがですか。

瀧口：記念日植樹券は2010年から2016年までいただいてきました。御在所岳の標高は1,200mあり高い山です。だから、一生懸命植えても年に1～2㎝しか伸びません。苗木は元気に育っているし、頂上は国定公園なのでそれらしくしたいのに、見栄えがしない。しかし、“種から育てる”ことをモットーにその山の土壌に合った木々を根気強く育成しようという意識で活動を続けています。植樹ツアーでの思い出といえば、ツアーの抽選に落選された方が、植樹当日に、自費で山頂まで登ってこられたことです。よほど御在所岳で植樹をしてみたかったのだと思います。

▲桜ライン311・岡本翔馬

―では、「桜ライン311」の岡本さん、現状はいかがでしょうか。

岡本：私たちの目的は“東日本大震災の記憶の伝承”で、そのために桜の木を使わせてもらっています。2013年から記念日植樹券をいただいてきました。いつか岩手県陸前高田市にまた津波が押し寄せたとき、自分と自分の大切な人を守れるように、市内の津波最大到達地点に桜を植樹しています。災害の記憶は碑を建てることが多いですが、“なぜ記憶の伝承に桜なの？”という問いに私たちは“碑では多くの方の記憶から消え去ってしまう、多くの人がポジティブに愛せるもので震災を伝えられたら”と答えています。2011年から植樹を開始して10年が経ち、これまでに植えた本数は1,789本。徐々に桜のラインになり始めました。

▲時ノ寿の森クラブ・右／松浦成夫、左／大石淳平

―最後に「時ノ寿の森クラブ」の松浦さん、里山の現状についてご報告ください。

松浦：里山の多くは個人の財産である民有林で、手を入れないので荒れたまま放置されているのが現状です。それらは、土砂崩れなどの災害を引き起こし社会のリスクとなりますので、私たちは所有者に代わって里山を守る活動をしてきました。しかし、使命感や思いをもった人たちだけが守るのでなく、多くの方たちに参加して体感してほしいと考えていました。その思いが伝わったのか、記念日植樹券事業の植樹NPOに選んでいただくことができ、2015年から記念日植樹券をいただいています。中部電力の村瀬さんや大谷さんがしっかりした理念と熱い思いで支援をしていただいていることが素晴らしいと思っています。

▲豊田市、中部電力、三河の山里課題解決ファームの3者が協定締結

▲中部電力・村瀬直利

むすぶ。ひらく。

▲コーポレートスローガン

―今後の活動について意見交換をする前に、主催者側である中部リサイクルと中部電力の大きな組織変化について、まず中部リサイクルについて萩原から、そして中部電力について村瀬さんからご報告します。

萩原：中部リサイクル運動市民の会は1980年に設立され、記念日植樹券事業は2001年に萩原、中川、庄司の内部プロジェクトとしてスタートしました。その後、2007年に中部リサイクルの代表が交代して、現在は永田が代表に、この会場に来ている和喜田が事務局長に就任し、記念日植樹券事業を引き継いでいます。私と庄司は現在、豊田市、中部電力と（一社）三河の山里課題解決ファームが3者協定で進める地域新電力会社「三河の山里コミュニティパワー」の活動に関わっています。実は、記念日植樹券事業において、我々には『中部電力との持続可能な地域のエネルギーについて協議できる関係づくり』というミッションもあったのですが、これについては昨年、この地域で新電力会社を中部電力と共同で設立したことで達成できたと考えています。そんな事情もあり、記念日植樹券事業20周年の節目に、今後のあり方を模索する必要がありました。

村瀬：2020年4月から、当社は送配電事業および販売事業を分社化し、新たな体制でスタートしました。それらは、持株会社の「中部電力株式会社」、送配電事業会社の「中部電力パワーグリッド株式会社」、販売事業会社の「中部電力ミライズ株式会社」。そして新しいコーポレートスローガンは「むすぶ。ひらく。」です。人と人、人と社会をつなぎ、むすびあわせることで、この先もコミュニティを支えていきたい。そして、人の可能性と未来をひらいていきたい。そのような思いを込めました。

記念日植樹券事業の今後のあり方については、本日をキックオフの日として、中部リサイクルさんをはじめ、各地の植樹NPOのみなさんの技術と技術をむすびあわせ、各課題の解決につなげていければと思います。そして、各地域と絆を深めながら、新しい価値を生み出していきたいと考えています。

3. 第2部「今後の活動について」

▲緑化旅団緑の大地・教育支援

▲緑化旅団緑の大地・村民自らが植樹

―ここからは、NPOのみなさんとの意見交換会に入ります。みなさんが活動をする上での課題や今後の活動への期待を、中部電力さんの新たなコーポレートスローガンなども踏まえながら、みなさんがどう考えているかうかがいたいと思います。では、用意していただいたスライドを見ながら、「緑化旅団 緑の大地」の娜日蘇さんお願いします。

娜日蘇：植樹前は広い面積が砂漠化し、子どもたちに残すことができない状態になっていました。2011年までは記念日植樹券事業で「緑の大地」のツアー参加がありましたが、2012年からは、金連川（きんれんせん）植樹団や私の父母を含めた村民、小中高の学生など、現地の人たちを中心に植樹しています。しかし日本と違って、年間の降雨が100～400㎜しかないので、年間20㎝しか伸びません。また、植えた苗木は6割しか残らないのが現実です。

砂漠化は遊牧民の貧困につながり、経済的に厳しい学生の教育支援も必要ですから、植樹と共に支援活動も行ってきました。そのような地道な支援活動の甲斐もあり、現地の住民の意識が、自然を自分たちの力で守ろうという方向へ変わってきました。現地を2014年に視察したときは、ポプラも大きくなり飛んできた草の種が根を張り、砂地がほぼ覆われていました。

しかし、自分たちの力だけで砂漠化を防ぎ植樹を続けることは難しいと考えています。継続的な支援を期待しています。

―次は「桜ライン311」の岡本さん、今後の展望を語ってください。

▲桜ライン311・植樹会

岡本：桜の植樹本数は1,789本になりましたが、目標とする“20年で17,000本”の10%に過ぎません。参加者は10年で6,500人くらいですが、今後も多くの方に参加していただき東日本大震災の教訓をお伝えしたいと思っています。中部地域からの参加者や寄付者、新聞などのメディアの取材も多いです。今後30年間は、活動を続ける予定なので、若手スタッフの育成も課題のひとつです。現在の事務局スタッフ7人は、専業として働いています。中長期を見据えた組織づくりと、専門性を持つスタッフ育成は団体のテーマですね。

近年は、あちこちで激甚災害が起きています。自然災害で亡くなる方がいなくなるよう、東日本大震災の経験を他地域へ伝え、全国のみなさんと共に歩んでいきたいと考えています。

▲桜ライン311・スタッフ

—2011年の東日本大震災の時は、「記念日植樹券事業」の10周年の折り返し地点でした。しかし激甚災害を目の当たりにして、中部電力も中部リサイクルもどう行動すべきか悩みました。こういった災害時に被災地とどう関わっていったらいいのでしょう。そのあたりを、中部電力の村瀬さん、いかがですか。

村瀬：トレンドだけで終わる一瞬のお付き合いではなく、相当な時間をかけエリアを越えて、被災地域と付き合っていきたい。“何ができるのか”をみなさんと一緒に考えたいと思っています。

—では、「ムラのミライ」の和田さん、今後の活動についてどうお考えですか？

和田：私たちが行っていた植樹は、みなさんと少し違うと思います。現地の方たちが畑を開いて農業をしていた場所へ、木を植え直す活動をしていたことです。その村つまり共同体の目先の経済的な部分を満たしていくことは、彼らの存立基盤を壊すことにもなると考えています。そういった“生きるか死ぬか”のせめぎ合いのなかで、植樹をすることなのです。だからこそ長期的なビジョンを持ち、現地の共同体と相談しながら活動していくことが大事です。

振り返って日本を見ると、そういう地域共同体が無くなっていく現実があります。そこで、中部電力さんに「都市部で木を植えて都市を緑にしていくこと」をご提案します。すぐには無理だと思いますが、電柱を地中に埋めて植樹スペースを作ることができるかもしれません。また、森をつくると同時に、水資源のことを考えることも大事だと考えています。

私たちは何十年も発展途上国と付き合ってきましたが、進行する土壌崩壊と環境破壊は世界中どこでも同じです。日本の現状も、経済という方向へ傾いた結果こうした災害が多発しています。私は、大きく発想を変えて、どこかで環境と折り合いを付ける時期にきたのだと思います。中部電力さんと中部リサイクルさんが、今までの知識と経験を使っていい方向へ進んでいかれることを期待しています。

▲ソムニード（ムラのミライ）・2011年のプットシル村

▲ソムニード（ムラのミライ）・植樹したプットシル村の子どもたち

▲森林の風・地元小学校での森林教育活動

▲森林の風・地元企業との植樹活動

▲時ノ寿の森・源流域の伐採など

▲時ノ寿の森・都市との交流

▲白川郷村塾・庄川と植樹されたアジサイ

―次は、地に足の着いた活動をされている「森林の風」の瀧口さん、いかがですか？

瀧口：我々は今まで、行政と関わりを持たずに主に企業とタイアップして活動をしてきました。苗木も15社ほどの企業から支援いただき植樹しています。日頃の活動は、森に入り間伐などをしたり木を植えたりしていますが、それだけで手いっぱいの状況です。前へ進んではいますが、山に入れば入るほど荒廃が目立ちます。もっと奥へ入らねばと思いますが余力がありません。

荒廃の原因のひとつは、三重県に戻る意志がない山の地主が、びっくりするほど多いことです。また最近は、海外からやってきて、山で勝手なことをする人たちもいます。このような状況でも、ふるさとの水源の森を何とか守りたいと思っています。

―森林の多面的長期的な管理を目指す「時ノ寿の森」の松浦さん、どうぞ。

松浦：私たちが暮らすふるさとの森は荒廃し、森の所有者が村にいない不在村が増えています。私たちの団体はグローバルな考えを持っていますが、目の前の現実に対処するだけで精一杯と痛感する日々です。だから活動を持続していくには、さまざまな面で協力していただける企業や行政や団体の方々とのつながりを大事にしなければならないと考えています。

これからの活動として、「山と海をつなぐ源流域の間伐」「夢マップづくり」「地域資源を生かした都市との交流体験」などを予定し、森林と共生する循環型社会を目指します。また、2024年からは全国民向けの森林環境税の導入が始まりますから、次世代へこの活動をつなげる“橋渡しの時期”がきているのではと期待しています。

―最後に、「白川郷村塾」の田口さん、ご発言をお願いします。

田口：ここは冬の積雪量が多いので、雪が消えるとあちこちに倒木が残って後片付けが大変で、木がなくなった後の補植も考えています。また昨年は、飛騨東部が大きな豪雨災害に見舞われました。年々、災害の規模が大きくなっていることを実感しています。私は建設業に携わっているので、その見地から災害の復旧工事についてお話しします。災害現場の修復では、将来にわたって安全で堅固にするため、どうしてもコンクリート造りになってしまいます。最近は復旧工事の工法が見直されつつありますが、その時に植樹作業も加えるとよいのではないでしょうか。

▲白川郷村塾・道標「一本の木は地球という森の入り口」

活動できる人数が少ないのでどこまでできるか分かりませんが、今ある木々を大切に管理していきたいと思います。

―私は、記念日植樹事業を、ずっと“入り口”だと考えてきました。和田さんや瀧口さんのような切り口もあれば、田口さんのような思いがあってもいいのではないでしょうか。座談会は終わりに近づきましたが、植樹団体同士がこうした場を持つのは初めてです。最後に何かあればひと言ずつお願いします。

瀧口：“山に入ろう”を合い言葉に、チェーンソーを使える会員が集まってスタートしましたが、今は森の生態系を学ぶ勉強会を始めるようになりました。本日の座談会をきっかけに、私たちが知らないジャンルのことは他団体に聞きに行こうと考えています。

松浦：「森林の風」の瀧口さんと、お互い大いにつながり合って活動をしていきたいと思っています。

岡本：目的や課題はそれぞれ異なりますが、木を扱うことは共通しています。しかし、こういったNPOの取り組みは、社会的にまた一般の方々に共感してもらえるような伝え方がなされていません。だから、地域のみなさんに分かってもらえるような“入り口”を用意することが大事になると思います。

4. 閉会のあいさつ　中部電力 長治宗範グループ長

―そろそろ時間になりましたので、中部電力の広報推進グループの長治グループ長から、閉会の挨拶をいただきたいと思います。

長治：リモート方式での開催でしたが、大変有意義な時間でした。この事業でお世話になった方々から話が聞けてとても勉強になりました。各NPOの課題や中部電力への期待などもいろいろと聞けましたので、みなさまの知恵をいただきながら、連携を前提とした新しいスキームをつくっていきたいと思います。

まずは、ＮＰＯのみなさまが活動拠点を相互に視察する機会を持ちたいと考えています。そして、課題や好事例などを共有しながら、30周年、40周年を迎えられる持続可能な事業にしたいと思いますので、今後ともよろしくお願いします。本日はご参加いただきありがとうございました。

記念日植樹券事業 20周年記念報告書

「1本の木は 地球という森の入り口」を合い言葉に 活動した20年を振り返る

2021年3月31日発行

〈 企画・編集 〉

中部電力株式会社 総務・広報・地域共生本部広報推進グループ

認定NPO法人 中部リサイクル運動市民の会

〈 座談会参加NPO 〉

認定NPO法人 ソムニード（現・ムラのミライ）、NPO法人 白川郷村塾、NPO法人 緑化旅団 緑の大地、

認定NPO法人 森林の風、認定NPO法人 桜ライン311、NPO法人 時ノ寿の森クラブ

〈 発　行 〉

中部電力株式会社 総務・広報・地域共生本部広報推進グループ

〈 制　作 〉

リンコムアソシエーツ有限会社